

かずさの博物誌

キョウジョシギ

～洋上を数千キロ飛ぶ～

文・写真／成田篤彦

2011.10.20

三年前の秋のことであった。
午後には小櫃（おびつ）川の干潟に

行った。

柔らかい日がさし、潮風で黄色の
セイタカアワダチソウやハチジョウ
ナの花が海岸で揺れていた。

満潮線の砂地に、アオサ（海藻）
と空き缶や発泡スチロールなどのゴ
ミが流れ着いていた。アオサは腐っ
てドロドロになり、表面が白く乾い
て、パカパカになっていた。それが、
数メートルの幅で2～3メートル
に渡って海岸をおおっていた。腐っ
たアオサに踏み込むとスルッと滑る。
干潟の砂地まで出るのに足元がおぼ
つかなく苦労した。

五～六メートル先のなぎさ（渚）
まで出て観察したが、目新しい野鳥



▲キョウジョシギ シギ科

体長22cm。上総では旅鳥、県要保護生物

アラスカやシベリアで繁殖。春と秋に太平洋の島に渡る。手前はウズラシギ

＝2008年10月7日 盤洲干潟 筆者撮影



©成田篤彦

▲海岸を急ぎ足で歩くキョウジョシギ

＝2008年10月7日 盤洲干潟 筆者撮影

がみられず、陽が落ちる前にもどつ
てきた。すると一羽のキョウジョシ
ギが、漂着したアオサに混じる棒や
空き缶のすき間にくちばしをいれて、
絶え間なく何かをつまんでいる。び
っくりしたのは、ときどき、空き缶
や竹の枝などをくちばしでひっくり
返したり、脚で蹴飛ばしたりして、
えさを探している。「乱暴な鳥だな
あ」と思った。キョウジョシギは「京
女のシギ」の意味だと聞いていたの
で、おしとやかで上品な鳥だと思っ
ていたが。

ちなみに羽の模様が美しい着物に
似ているとか鳴き声がキョウジョと
聞こえるからとの説もある。どうも

こちらの方がふさわしい。

ハチジョウナが生える砂浜
に腰を下ろして、カメラを構
えていると、えさ採りに夢中
なのか、私がいるにもかかわ
らず、眼の前にやってくる。
「え！こまで近づいてくれ
るの」と呆気にとられた。お
かげで、じっくり観察するこ
とができた。

大きさはムクドリよりやや
小さく、シギとしてはくちば
しの根元が太く頑丈な感じが
した。脚も短く、太くたくま
しい。それにしてもくちばし
を突き出して、えさを捕る動
きは素早く、その瞬間の写真
は、皆、頭がぶれていた。

つまんでいたえさは半透明の数ミ
リのヨコエビ類であった。流れ着い
たペットボトルを棒でどかすと、そ
れがノミのようにピンピンと飛び出
してくる。このえさを目当てにウズ
ラシギやミユビシギなどもやってき
ていた。

おそらく、渡りの飛行でエネルギー
を使い果たし、私を気にするより、
腹を満たす方が先だったのであろう。

こんなに近くでキョウジョシギに
会うのはめつたにない幸運であった。
翌日、再び訪れると同じ場所にキ
ョウジョシギがいて、陽ざしを浴び
て干潟を歩いたり、羽を開いたりし
て、くつろいでいた。

この干潟で足輪をつけたキョウジ
ヨシギが越冬地のオーストラリアで
発見されている。このシギはこの干
潟でえさをとり、体重を2～3倍に
増やして、再び南方へ渡っていくこ
とが分かっている。また、日本から
四千四百キロも離れたアラスカ西部
の島との往復が数十例確かめられて
いる。

なかにはアラスカからハワイまで
ノンストップで飛ぶものもあるそうだ。
渡りの飛行を支えるこの干潟のえさ
の豊富さと渡ってくるキョウジョシ
ギのエネルギーもすごいなと思う。



©成田篤彦

▲羽を開いてくつろぐキョウジョシギ

＝2008年10月7日 盤洲干潟 筆者撮影

〈主な参考文献〉

2011年度版千葉県レッドデータブック。

北川1976キョウジョシギ四季の野鳥

静岡新聞社